

# シリーズ 中学校武道

## 授業の充実に向けて 104

### 複数種目授業の実践報告と課題⑱ (相撲・なぎなた)

愛知県弥富市立弥富中学校 教諭 三戸 良介

本校は、愛知県の西部に位置する金魚の街・弥富市にある中学校のひとつである。全校生徒は629名、全学年各6学級、特別支援学級2、計20学級の中規模校である。

平成6年に愛知県で開催された『わかしゃち国体』の際に、弥富市(当時は弥富町)がなぎなた会場になった。その準備のため、「弥富町なぎなた連盟」が発足。せっかくなのでこの弥富町がなぎなたの競技会場地に決まったのだから地元から選手を育てようと町内すべての小・中学校になぎなた部をつくり、同時になぎなた教室を開催し、競技力向上に努めた。

本校でもなぎなた部が平成元年に創部。平成25年度より、武道授業において、男子は相撲、女子はなぎなたに取り組んでいる。

#### 1 武道の取組について

本校では、武道の必修化に伴い、柔道は怪我が心配なこと、剣道は道具を揃えることが難しいことなどの理由で、男女ともに相撲に取り組んでいた。平成25年度より、市の協力を得てなぎなたの道具を揃えてもらい、女子はなぎなたに取り組むことになった。

#### 2 相撲の授業実践

相撲の授業を進めていくにあたり、生徒に興味関心をもたせることと、安全面の配慮をしっかりと行うことを第一にした。また、生徒同士でペアやグループを作り、お互いに意見を交換し合う場を設け、学びを深めていくことを大切にしました。



手押し相撲の様子



簡易試合の様子

るために、授業の導入で様々な相撲遊びを取り入れた。指相撲、腕相撲、手押し相撲、踵踏相撲、引き相撲の5種類を行い、仲間と楽しみながら、押すことと引くこと、感覚を身に付けさせた。また、楽しみながら行うだけでなく、礼儀を尊重させるために、対戦前後は必ず「礼」をすることを約束事として徹底した。

導入の次は四股や受け身、すり足、押しなどの相撲の基本的な動作を指導した。特に安全面の配慮をするために、受け身の練習は繰り返し行なった。真後ろの方向だけでなく、右斜め後ろや左斜め後ろなど様々な方向の受け身をとる練習を行い、どの方向に倒れても、自らの安全を確保できるようにした。安全のために、受け身の練習の必要性を生徒に何度も説明をし、真剣に取り組むよう声をかけた。

さらに、相撲に対する興味関心を高くするために、まとめて簡易試合を行った。簡易試合では、礼を重んじ、押しを中心に試合を組み立てさせた。また、簡易試合を

団体戦で進め、個人競技である相撲に団体競技のよさを取り入れることで、チームの一員としての自覚をもち、みんなで協力し合い、今まで学んだ技能を生かしながら試合を進めることができた。生徒は勝つと嬉しそうな、負けると悔しそうな表情を浮かべていたのが印象的であった。また、勝敗に関係なく「もっとやりたい」と意欲的に試合に取り組もうとする姿が見られ、生徒の相撲に対する興味関心の高まりを感じた。

授業では、ペアやグループ活動を通して学びを深めていく時間を大切にしたい。まわしを締める単元では、ペアでお互いのまわしを締め合う実践をした。最初はうまく締めることができず、ほとんどの生徒が悪戦苦闘していたが、回数を重ねるごとに上手く締められるようになった。授業が終わるころには、ほとんどの生徒が誰からも助けを借りずじつかりと締めることができるようになった。また、押しの授業では、目標を「うまく相手を押せるようにしよう」と示した。うまく押すためには何

が必要なのか、どうしたらうまく相手を押せるのか、ペアやグループで考える時間を十分に確保した。

話し合い活動では、お互いの体勢がどのようになっているのかを伝え合い、改善する点を挙げていった。うまく押せない原因として、「腰が高くなっている」ことや「腕だけで押している」など意見が出され、それを改善するためにはどうしたらよいかを考える姿が見られた。また、改善点がなかなか出ないグループには、「色々な角度から見よう」と声をかけた。その結果、今まで真後ろから動きを見ていた生徒の多くが、横から見たり、正面から見たりすることで視野を広げていった。視野を広げることで生徒の気付きも増え、課題の解決につながっていくことを実感した。押しの練習の成果をまとめた簡易試合に生かすことができた生徒が多かった。これまで、全ての単元で取り入れてきたペア活動やグループ活動は、相撲においても技能の向上を図るために有効であると感じた。



3  
なごなたの授業実践

はじめに、なごなたと弥富市・本校の関わりについて詳細を述べ



打ち返し練習



ペア学習②

ペア学習①

てみたい。本校の沿革史によると、1988（昭和63）年に本校で「なごなた模範競技会」、「弥富町なごなた講習会」が開催されたのである。そのあたりで「弥富町なごなた連盟」が発足したようである。

その年の前後から、なごなたの周知と競技の裾野を広げるために、社会体育でなごなたが行われたり、小中学校の部活動に「なごなた部」ができた。本校のなごなた部は1989（平成元）年に創部された記録がある。そして、前述のように、1994（平成6）年に愛知県で開催された第49回国民体育大会の際、なごなた会場に弥富町総合社会教育センターが使用されたことで、なごなたと弥富市の深い関わりが始まった。

国体開催を通して、市全体で団結成功に導いたという証を語り伝えていくために、平成25年より弥富市では中学1・2年の授業になごなたを取り入れた。そして同年度より、本校の女子においても、なごなた授業が開始されたのである。

本校の女子は、基本的に1年生と2年生の2年間に、武道授業において、なごなたを行っている。小学校になごなた部があったり、地域の連盟に所属して習っていたりと、なごなたへの親しみは他の地区に比べて、地域に根付いている。

るように感じる。しかし、多くの生徒は、見たことはあっても、実際になごなたを持ちたり、なごなたの動きをしたりするという経験はなかった。

それは指導者である体育の教員も同じであった。そこで、弥富市教育委員会に相談し、弥富市なごなた連盟から指導者を派遣してもらい、外部指導者とのチームティーチングの形式で授業を進めた。複数の指導者で授業を行うことで、生徒への声かけが増えたことと、専門的な知識や技能をもった指導者からの的確なアドバイスのおかげで、生徒の理解が深められ、技能向上につながった。特に武道においては、外部講師を活用することの成果は大きいと感じた。

単元の導入には、なごなたと弥富市の歴史についても取りあげて、なごなたが弥富市と関係が深い種目であることを理解させ、興味関心をもたせた。そして、礼法やなごなたの扱い方、基本的な動作の学習へと進め、武道を身近に感じる中で、仲間と協力して技を

教え合う場面を作りながら取り組ませた。

1年生では、構え方から体さばき、基本的な打ち方や受け方を教えた。次に、習得した技を使っての打ち返しの練習を通して、なごなたの楽しさや難しさを実感させた。

2年生では、前年度に習得した技を使って「しかけ応じ」と「リズムなごなた」を実践した。集団で現代のリズムカルな音楽に、伝統的ななごなたの動きをあわせることで、なごなたの楽しさを別の視点からも味わわせることができたと感じる。

「リズムなごなた」では、時間数が限られているため、その場で発にお互いにアドバイスを出し合

って動きを修正していく必要がある。そこで、鏡やタブレット機器を使い、自分たちの動きを客観的に捉えさせる工夫をした。そうすることで、生徒同士が技のポイントや動きのイメージをその場で出し合い、正しい動作と自分の実際の動きを比較しながら修正することができた。このようなグループでの教え合い学習が、学習意欲と技能の両面を向上させるのに、大きな役割をはたしていると感じた。

4  
まとめ

相撲となごなたの授業実践を通して、武道を身近な存在として感じ、日本の伝統と文化に触れさせることができた。また、興味関心をもたせて楽しむだけでなく、礼儀作法を身に付け、武道特有の精神や技能を学ぶこともできた。そして、武道をより身近に親しむた

めには、相撲となごなたとも、全面的配慮をし、怪我や痛みがなないように行うことが大切である

改めて感じた。

一方で相撲では、現在簡易試合を行う土俵を作る際に、俵の代わりにまわしを使用しているが、設置するのに時間がかかってしまう。さつと広げると簡易的な土俵ができるなどの道具を工夫して時間を確保し、運動量を増やすことが課題である。

また、なごなたについては、外部講師を頼らずに授業ができるような指導計画を立てることが課題として残っている。

これからも、生徒たちが楽しみながら武道に親しめるよう、授業を工夫して実践したいと思う。

教育のプロが選ぶ  
信頼の紙面

山積する教育課題の解決のヒントに  
日本教育新聞社

教育が大きく  
転換しています

活字離れの時代  
俯瞰で見られる教育情報

本紙独自の全国調査を中心に  
教育界の羅針盤

お申込・お問い合わせ  
0120-43-3746

- 形態 —  
B3（プランケット）判（12頁）
- 発行 —  
毎週月曜日（月4回・第5週休刊）
- 購読料 —  
月額 2,700 円  
（本体価格 2,500 円＋消費税 200 円）  
年額 32,400 円  
（本体価格 30,000 円＋消費税 2,400 円）
- お支払方法 —  
銀行引落からコンビニ支払、  
カード決済まで、ライフスタイルに  
あわせてお支払方法がございます。